

環境共生住宅 「聴竹居」を見学して

台風が接近している梅雨の晴れ間の7月15日、京都大山崎町の「聴竹居」をV G 観輪の会の「わがまち紹介」で訪れました。JR 山崎駅から徒歩8分。だから登りの山道を行ったところにあります。

藤井厚二さんという、建築家が自宅として建てた和洋折衷の平屋建ての木造建築です。外観は洋風で周囲の深い緑に囲まれて埋まるように建っていました。予約していた「聴竹居」には年配の男性が説明役として待って居てくださいました。建築家藤井氏は自ら理論化した環境工学の知見を設計に盛り込み様々な工夫を住居に生かしておられます。

まず中に入ってすぐ気づくのは窓が大きく、広く作られていることです。そして畳の部屋が約40センチメートル位高くなっています。これは和洋折衷で直ぐそばに洋間の椅子があり畳に座ったとき目の高さが椅子に座った人と同じようにするためなのです。また少し離れた住居の下の方から床下に土管を通して下の冷たい空気が屋内に入



り、それが台所の上の天井から抜けるようになっており室内の換気と共に台所の臭気を逃がすことにもなります。現在のエコにも通ずる工夫です。また大きいガラス窓を支えるため、柱を床下から天井まで通し、窓の部分以外は壁の中に隠したり、窓の柱と障子の合わさる場所は柱に凸の出張りを作り、障子側には凹の溝を刻んで隙間をなくすなど説明して貰わなければわからない工夫が諸所に施されていました。

サンルームから以前は淀川など三川合流の景色がみえたそうですが、今は樹木が生い茂り見晴らしはよくありません。窓の外の見えないように窓ガラスの上部をすりガラスにするとか、外は楓の木がたくさんありましたが、冬は葉が落ちて暖かい日光が入るといふことでした。そのほかいろいろの感心するような設備の素晴らしさに言葉もありませんでした。

記：牧戸富美子

会員だより

熊野参詣道

中辺路第5回

古来日本人は温泉が好き

今年典型的な梅雨模様。7月8日出発時、晴れてきそうな様子でシメシメと思いきや、田辺に近づくにつれ、まさに暗雲垂れこめて来て、ほぼ中辺路コースの中央辺りのスタート地点で全く雨になる。前回ゴールした発心門（ほっしんもん）王子、猪鼻（いの

はな）王子、船玉大社を再度お参りし、赤木越え起点まで約40分遡り、三越峠で準備体操の後みんな雨の中、意欲満々で歩きます。今日のコースは「水転びの道」と呼ばれるらしくは、リタイアする所がないかと注意を受ける。最初の通りコースが前回下りで楽々だったのに、今回反対で、足取りの重くなったメンバーがいた。若い女性の語り部のリードと機転のきいた会話で、7kのアップダウンの激しいコースを全員安全にクリアし、日本最古という湯峰温泉に着いた時はつぼ湯や足湯の看板につられ、遂、足を踏み入れたくなった。古人の熊野詣の時、本道から分かれた赤木越えが好まれたのは解る気がした。多分貴族・皇族など身分の高い参詣者は禊と称して、温泉で疲れた体を癒して、熊



水場と離

野本宮に向ったのである。残念だったのは早くつけば、川原で温泉玉子を自分で作って下さいと言われていたが予定より遅くなり、温泉玉子の思い出は出来なかった。今回雨の中ゆえ見る事が出来た霧中の幻想的な杉檜林、一遍上人にまつわる鍋割地蔵や献上茶屋跡、昭和50年代まで住んでいた柿原茶屋跡、最後の胸突き八丁の坂道を登り、今日の無事を感じた湯峯王子社の各スポットを良い思い出にしよう。

記：上村サト子

半夏生

(はんげしょう)



花というより葉を楽しむ植物です。名前のいわれは半夏(烏柄杓)という薬草が生える頃とか、

ハンゲショウ(カタシロ草)が名の通り半分白くなって化粧しているよう、ともいわれる。旧暦七十二候で半夏生を夏至から数えて11日目の7月2日としている。農家で田植えを終え、一息つく頃、この日から5日間は休みとする地方もあったらしい。稲がしっかり根付くよう願掛けたと云う事から、“蛸の日”になったか。私はスーパーのちらしで知った。蛸には夏バテ予防の成分が多いらしい。香川県では“うどんの日” 日本各地にいろんなしきたりの伝わる暦の上で大切な日に半夏生の植物を思い出して下さい。

記：上村サト子

ソテツの花が咲いています

富田公民館の前の東側のソテツに花が咲いています。ソテツは、いつも新葉がでますが、手入れが良いと10年に一度位花を咲かせるくらいだそうです。富田公民館の前に2個棒状の花ですから雄花のようです。



花言葉の通り“雄々しい”